

1. 信仰に生きるキリストの弟子の養成

主の弟子は状況に左右されず聖霊に聞き従い、神を信じ人を信じて人々の救いと解放をもたらす。十字架に死んで神と共に生きるとは、自分と人々の罪からくる咎を覚悟し信仰と希望と愛とを持って福音の祝福の中に生きることである。キリストの弟子の養成こそ教会の使命である。

2. 真理と祈りと讚美に満ちた信仰生活の指導

聖書の教え、真理は人を自由にする。祈りは問題や悩みを解決し、神の御心を確認する。讚美は癒しと喜びと力を与える。教会はそれらを教え指導し、互いの交わりの中で模範を造り出していく。

3. キリストを頭として愛によって結び合わされた共同体の形成

教会には多種多様な人々が神によってこの世から召し出されてくる。この信者を整え、神への奉仕という使命を果たすように導くには、キリストの弟子として十字架を負い主に従う指導者層が確立されなければならない。整えられ愛し合い一致した教会こそ神の栄光が現され成長する。

4. 隣人に対する愛に基づいた執り成しと伝道の実践

神を愛する人は人をも愛し、行いを伴う信仰を持つ。真理を知らず罪と咎によって苦しんでいる人々を愛し、執り成し、福音を伝えることによってこそクリスチャンは成長し、祝福される。

5. 地域と社会に貢献する魅力的な教会員の歩みと家族形成

教会と教会員の活動・事業・啓発運動を展開し、社会に影響を与えながら、同時に愛し合う家族を形成し、接する人々に福音を現していくことが、日本のリバイバルに必要であると私たちは信じる。

今週の聖書

創世記 38:6 ユダは、その長子エルにタマルという妻を迎えた。

38:7 しかしユダの長子エルは【主】を怒らせていたので、【主】は彼を殺した。

38:8 それでユダはオナンに言った。「あなたは兄嫁のところに入り、義弟としての務めを果たしなさい。そしてあなたの兄のために子孫を起こすようにしなさい。」

38:9 しかしオナンは、その生まれる子が自分のものとならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないために、兄嫁のところに入ると、地に流していた。

38:10 彼のしたことは【主】を怒らせたので、主は彼をも殺した。

38:11 そこでユダは、嫁のタマルに、「わが子シェラが成人するまで、あなたの父の家でやもめのままでいなさい」と言った。それはシェラもまた、兄たちのように死ぬといけないと思ったからである。タマルは父の家に行き、そこに住むようになった。

38:12 かなり日がたって、シュアの娘であったユダの妻が死んだ。その喪が明けたとき、ユダは、羊の群れの毛を切るために、その友人でアドラム人のヒラといっしょに、ティムナへ上って行った。

38:13 そのとき、タマルに、「ご覧。あなたのしゅうとが羊の毛を切るためにティムナに上って来ていますよ」と告げる者があった。

38:14 それでタマルは、やもめの服を脱ぎ、ベールをかぶり、着替えをして、ティムナへの道にあるエナムの入口にすわっていた。それはシェラが成人したのに、自分がその妻にされないのを知っていたからである。

38:15 ユダは、彼女を見たとき、彼女が顔をおおっていたので遊女だと思い、

38:16 道ばたの彼女のところに行き、「さあ、あなたのところに入ろう」と言った。彼はその女が自分の嫁だとは知らなかったからである。彼女は、「私のところにお入りになれば、何を私に下されますか」と言った。

Gen38:6 Then Judah took a wife for Er his firstborn, and her name was Tamar.

38:7 But Er, Judah's firstborn, was wicked in the sight of the Lord, and the Lord killed him.

38:8 And Judah said to Onan, "Go in to your brother's wife and marry her, and raise up an heir to your brother." 38:9 But Onan knew that the heir would not be his; and it came to pass, when he went in to his brother's wife, that he emitted on the ground, lest he should give an heir to his brother.

38:10 And the thing which he did displeased the Lord; therefore He killed him also.

38:11 Then Judah said to Tamar his daughter-in-law, "Remain a widow in your father's house till my son Shelah is grown." For he said, "Lest he also die like his brothers." And Tamar went and dwelt in her father's house.

38:12 Now in the process of time the daughter of Shua, Judah's wife, died; and Judah was comforted, and went up to his sheepshearers at Timnah, he and his friend Hirah the Adullamite. 38:13 And it was told Tamar, saying, "Look, your father-in-law is going up to Timnah to shear his sheep."

38:14 So she took off her widow's garments, covered herself with a veil and wrapped herself, and sat in an open place which was on the way to Timnah; for she saw that Shelah was grown, and she was not given to him as a wife.

38:15 When Judah saw her, he thought she was a harlot, because she had covered her face.

38:16 Then he turned to her by the way, and said, "Please let me come in to you"; for he did not know that she was his daughter-in-law. So she said, "What will you give me, that you may come in to me?"

「タマルの執念が祝福を勝ち取る。」 創世記38章6～16節

兄弟たちがヨセフを奴隷として売り渡した後、「ユダは兄弟たちから離れて下って行き、名をヒラというアドラム人の近くで天幕を張った。」(創世記38・二)。兄弟の乱暴に嫌気がさして一緒に住むのが嫌になったのでしようが、そこで住んだのが墮落したカナン人の近くでした。そこで、カナン人の娘を見染めて妻にしたのですが、名前は記されていません。妻として母として問題のある人だったと思われれます。

「ユダの長子エルは主の目に悪しき者であったので、主は彼を殺された。」(三)。ユダの家系を守るために、次男のオナンは兄嫁に子を産ませて相續させなければならなかったのですが、オナンは性行為をしても子供を産ませないように精液を地に流していました。「彼のしたことは主の前に悪しきことであつたので、主は彼も殺された。」(四)。長男も次男も性的に放埒であつたようです。

ユダは、嫁のタマルが不吉な女であると感じて、三男には近づけないようにしました。ここまでは、世の中にありがちなことです。私が、わざわざ、このような不幸で性的な墮落の話をするのは、タマルの信仰と執念がすごいからです。マタイの福音書にあるイエス様の祖先には、3人の異邦人の女性が掲げられています。それは「ユダが(息子の嫁)タマルによってペレツとゼラフを生み」(マタイ1・三)、「サルマが(遊女)ラハブによってポアズを生み、ポアズが(寡婦)ルツによってオベデを生み」(1・四)、と異邦人であり、不幸でありながら、執念と信仰によって勝利を勝ち取り、イエス様の系図に載った女性たちなのです。

この箇所を説教する牧師はあまりいないと思いますが、「福音に生きる」という主題で連続して説教する時に、虐げられ差別され不幸であつた女性たちが、その環境の中で不屈の精神で勝利を勝ち取つたことを話さないわけにはいかなないと考えました。「あなたがたの名が天に書きしるされてることを喜びなさい。」(ルカ10・三〇)とありますが、ユダの妻は聖書に名前が記されず、タマルが記されていることは大きなことです。

タマルは実家に帰されました。そのまま不遇を嘆いて人生を過ごすこともできたでしょう。いつの時代でも女性は、男性の支配下にあり、自分の意思で生きることが難しいものでした。タマルの里帰りに至るまでの生活も、不遇なものだつたことがわかります。夫エルも弟のオナンも、神に罰せられるほど俗悪な者だつたのです。女性として慰み者とされ、虐げられていたことは明らかです。多くの女性が、現代でさえ同じような生き方をしているのにも関わらず、それを嘆いているだけなのです。聖書は従順を教えますが、それは人格に基づいたものであり、不幸を甘んじろとは教えません。

タマルは、「このまま死にたくない。子供を産みたい。ユダの家系を残す義務がある。」と考えました。ユダは、前に述べたように、ベニヤミンの保証人となり、自らを奴隷となることを決心した親思いであり、アブラハム、イサク、ヤコブの家系を継いで、「王権はユダを離れず、王笏はその足の間に離れない。」(創世記49・10)と預言される義人です。ユダ部族の祖先としてダビデ、ソロモン、そしてイエス様に繋がり、現在のユダヤ人となるのです。しかし、長男、次男が死んでも、為すがままに3男のシエラが相續すると考えている男子でした。

信仰者と不信仰者の違いは、希望を持つか否かに区別されます。「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。」(ヘブル11・三)。義父ユダによってタマルが子供を得たことは道德的には褒められたものではありませんが、ただ、タマルは自分が罰せられないように「あなたの印章とひもと、あなたが手にしている杖を」(38・18)と保証を確保しています。そして、神がその時に子を宿らせています。そして、ユダに「あの女は私よりも正しい。」(38・26)と告白させています。子供を産む権利を主張したのです。むしろ、ユダもタマルもその後「二度と彼女を知ろうとはしなかった。」(39)のは当然なことです。義人ユダを動かしたのはタマルです。

日本人は「清く、正しく、争うことなく、怒ることもなく、平安で過ごす」ことを理想としています。しかし、聖書を読めば、正しい人の正しさも悪人とさほど違いはなく、悪人が攻めてきて争いなく済ませようと思えば略奪されるだけであり、平安で過ごすようとしてこの世から離れても、自己中心という人間の罪は変わることはありません。神にとつては、神を信じ従うということが、信仰の基準となるのです。「天の御国は激しく攻められていきます。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」(マタイ11・12)。穏やかに暮らしたいという願いは、自己保全の願いであり、神の国に入ろうと願うならば、熱心にならなければならないのです。

私たちは、体裁を装い、人の目を気にします。ともかく、異常な行動をしたタマルは神の目に留まり、その信仰を褒められたことは確かです。私は自らを価値ある人間だとは思っていませんでしたが、結婚前に妻に人目もはばからずに求愛行動をされて、これほど愛されるならば、この人に自分の人生を献げて良いかと思ひ結婚を決めました。その後も、妻の熱心さに動かされて伝道をし、牧会をしています。女性の熱心さは男性を動かすと思います。男性が従順を女性に要求するのは自分勝手だからです。日本の男尊女卑の生活は、罪性を許容するものだと思います。